



第20回医療の質・安全学会学術集会

教育セミナー2

「サステナブルなRRSを目指して
～市中病院でやってみた～」

日時

2025年 **11月8日(土)**
12:30～13:20

会場

京都市勧業館みやこめッセ 1F
第2展示場D **第4会場**



座長 **中村 京太** 先生

横浜市立大学附属市民総合医療センター 病院長補佐
医療の質・安全管理部 部長 診療教授



演題1

RRSのタネを蒔きました

演者 **山田 かの子** 先生

近江八幡市立総合医療センター 看護部



演題2

臨床工学技士がRRSで活躍できる場を目指して

演者 **鈴木 雄也** 先生

近江八幡市立総合医療センター 臨床工学科

- ※ セミナーは事前登録制です。第20回医療の質・安全学会学術集会公式ホームページよりご登録ください。
- ※ 教育セミナー事前登録締切日：2025年9月26日(金)
- ※ 当日の整理券配布はありません。

サステイナブルなRRSを目指して ～市中病院でやってみた～

演題1 RRSのタネを蒔きました

演者 **山田 かの子** 先生 (近江八幡市立総合医療センター 看護部)

院内迅速対応システム(RRS)の導入にあたり、当院では“スポットチェックモニタ”がスタッフの行動や意識に大きな変化をもたらしました。RRS導入前は、患者急変の予兆に気づいても言語化することの難しさがあり、病状悪化が見過ごされてしまうことがありました。こうした状況を改善すべく、早期警告スコア(Early Warning Score: EWS)を導入し、迅速なバイタルサインの把握や、病状変化をアセスメントすることから数値で可視化することにより急変前の予兆に気づくきっかけを作りました。これにより、スタッフの行動には明らかな変化が見られました。例えば、以前であれば医師の指示範囲内にあると見過ごされていた病状変化をEWSの上昇による報告でRRT要請につながっています。定期的な観察のタイミングで異常値に対する反応が早くなったほか、「報告のタイミングがわからない」といった迷いが減少し、現場全体が“行動できる空気”に変わってきているように感じています。

さらに注目すべきは、スポットチェックの導入がスタッフの“意識”にも好影響を与えたことです。バイタルサインを入力する際に表示されるEWSを目にすることで、意識的に患者に関わるような発言を耳にするようになりました。特に若手スタッフからは「何かおかしいを数値として伝えることができる」という声も寄せられています。スポットチェックモニタはバイタルサイン測定時に、呼吸数や意識レベルなどの入力ができ、測定値をもとにEWSが自動で算出されるので、日常業務の中で意識づけをするのに役立ったのではないかと思います。

本講演では、ハードの導入がソフト(人)をどう変えたのかを、現場のリアルなエピソードを交えてお伝えしていけたらと思います。現場を変えるのは人ですが、その人を動かす仕組みづくりの一例として、皆さまの明日へのヒントになれば幸いです。

演題2 臨床工学技士がRRSで活躍できる場を目指して

演者 **鈴木 雄也** 先生 (近江八幡市立総合医療センター 臨床工学科)

当院では、年間約20件の急変時ドクターコールが発生しており、その死亡率は約60%に上っていた。予期せぬ心停止や死亡を低減するため、2021年よりEWS(Early Warning Scoring: 早期警告スコア)を導入し、臨床工学技士もEWSの院内啓発活動に参画してきた。EWSの定着とRRS(Rapid Response System: 院内迅速対応システム)の作動機序の確立を目指し、2023年10月1日から2024年7月31日の間に一般病棟に入院した患者(生体情報モニター使用患者を除く)を対象に、フクダコーリン社製スポットチェックモニタSC-1800で、SpO₂、体温、収縮期血圧、脈拍数、呼吸数、酸素使用、意識レベルの7項目によりEWSを算出。0 Risk群(0点)、Low Risk群(1-4点)、Medium Risk群(5-6点)、High Risk群(7点以上)の4群にRisk分類し死亡率、予定外ICU入室率、急変時ドクターコール発生率を調査した。調査対象の患者数は10,380人、EWS算出の延べ件数は236,347件。全患者での1000入院当たりの死亡人数は40.30人、予定外ICU入室患者人数は17.25人、急変時ドクターコール患者人数は3.57人であった。調査結果よりEWSのRisk群が高いほど死亡率、予定外ICU入室率は高く、この研究では死亡率は0 Risk群に対しHigh Risk群では約161倍であった。

これらのデータにより、EWSはRRSの作動機序として有効なトリガーツールと考え、臨床工学技士の立場からEWSの必要性や精度向上の大切さを訴え、有害事象毎の振り返りを行い、2024年から開始したRRSへの運用支援に貢献している。今回の協賛セミナーでは、当院の最新データをもとに、臨床工学技士がどのようにRRSに関与できるかを紹介するとともに、市中病院におけるRRSの現状や今後の課題についても考察していく。